

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第32号

目次

庄政下のアーキビスト： ドイツ・アーカイブズ学の知の巨人 橋本 陽 2 京都大学大学文書館における研修について 野邑 理栄子 4 京都大学大学文書館の研修に参加して 村上 麻佑子 5 京大と三高—その微妙な関係— 西山 伸 6	リスボン市公文書館（Arquivo Municipal de Lisboa, Arco do Cego）見学記 元 ナミ 8 日誌 10 大学文書館の動き： 額原退蔵関係資料の公開 11 「雪山賛歌」と「エルダー先生」 元 ナミ 12
--	--



第三高等学校本館屋上でのスナップ（1940年頃）

後ろに京大の時計台や法経本館が見える。三高は、現在の京大吉田南構内に位置しており、両者は文字通り指呼の間にあった。なお三高の本館は、のち教養部（さらにその後総合人間学部）A号館として2002年まで使われていた。（関連記事6～7頁）

圧政下のアーキビスト： ドイツ・アーカイブズ学の知の巨人

帝国データバンク史料館研究員・アーキビスト 橋本 陽

ポツダム宣言受諾日前後、大日本帝国では記録の徹底した焼却が行われたのは有名な話である。この記録抹消のための行為は、中央省庁に止まらず、全国にある町村役場の単位にまで及んだ。町村役場では、戦時動員に関わる部署であった兵事係の記録が、特にその処分の対象となった。このとき、兵事係の中には、焼却しなければならなくなった記録を役場から自宅に持ち帰り、秘匿し続けた者たちがいた。彼らは、発覚した際の処分を覚悟しながら、地元から戦地へ送った人々の記録を燃やすことができないと考え、その保存を決意した。

圧政国家では、敗戦時の日本と同じように、記録の湮滅が行われるのは珍しいことではない。記録を一括して保管するアーカイブズがある場合、当然そこにある資料が狙われる。例えば、カンボジアでは、クメール・ルージュが、歴史の抹消を目的として、国立公文書館を解体した。また、イラク戦争では、アメリカ軍がバグダードに攻め入る三日前に、国立図書館・公文書館の職員に指令が出され、サッダーム・フセインを支えたバアス党体制に関与する記録が組織的に廃棄された。町村役場の兵事係のように、このような暴力的な措置に抗うアーキビストもいる。有名な人物が、南アフリカ共和国のヴァーン・ハリスである。彼は、1993年に中央省庁のいくつかの部署が機密記録の大規模な廃棄処分を進めようとしている事実を知り、その情報を報道局と弁護士にリークした。その行為はいくつかの法規の違反を伴うものであったが、それでもハリスは記録を守った。同じように、偽文書の作成と記録の隠匿という違法行為によって、アーキビストが人命を守った事例も有名である。ナチス政権では、ユダヤ人の認定

は祖父母がそうであるかどうかが大きく関係した。その制度を逆手にとり、オランダのアーキビストは、17・18世紀の結婚登録簿の原本を隠した上で、キリスト教徒とユダヤ教徒が婚姻していたことを示す偽造文書と差し替え、当事者たちが強制収容所に送られるのを防いだ。

上で挙げたような美しい話は、同業者である我々アーキビストの胸を高鳴らせる。自分も同じような場面に直面したときに、記録あるいは命を守るような選択をとることができるのではないかという思いに捕らわれる。しかし、現実にはイラクの事例を見ればわかるように、アーキビスト自身も国家の歯車の一つとして機能する場合が大半ではないだろうか。そのような人物の一人として取り上げたいのがヨハネス・パプリッツ (Johannes Papritz, 1898-1992) である。

パプリッツは、日本ではあまり知られていないが、ドイツのアーカイブズ学に非常に大きな功績を残した人物である。彼は、第二次大戦後、1949年からマールブルグ大学で教鞭をとった。彼の研究は多岐にわたり、その範囲は、記録管理の歴史からそれに関する深い知識に裏打ちされた資料群の構造分析論、そしてアーカイブズの編成と記述にまで及んだ。その知識の広さと深さは、彼が著した書籍、*Archivwissenschaft* が1526ページの大著であることに反映されている。ちなみに、日本との関わりで言えば、この書籍にはゲオルグ・ホルツィンガー (Georg Holtzinger) に言及する箇所がある。ホルツィンガーは、プロイセンで出版された記録とアーカイブズ管理のマニュアルの著作者であり、日本では明治期に『普国記録法』という名称で翻訳された。このほか、パプリッツは、編成・記述

の方法と目録項目の標準化にも取り組み、成果を残した。パブリッツは、戦後ドイツにおいて、アーカイブズ学の基盤を作った人物の一人であると言って間違いない。言うなれば、ドイツ・アーカイブズ学の知の巨人である。

このような輝かしい功績をもつパブリッツがナチス政権下で従事した職務が、ベルリン＝ダーレムにある出版局(Publikationsstelle)の指導であった。出版局は、1931年にプロイセン国立公文書館の一部局として設立された。設立の目的は、ドイツ東方研究(Ortforschung)の補佐にあった。東方研究とは、東欧におけるドイツ人の民族性と文化を研究する分野であり、ナチス・ドイツ時代になると、ユダヤ人など非ドイツ人の迫害を前提としたポーランド統治を学問的に正当化する役割を果たした。当初、出版局は、ポーランドにおける研究業績や報道の翻訳などに従事していたが、1938年にはナチスの情報機関であった親衛隊保安部(Sicherheitsdienst、以下SD)と共同して、民族浄化に協力する業務に取り組んだ。具体的には、ドイツ帝国内の「異民族」すべてを登録した民族集団索引、ならびにドイツ人リストの作成と管理を担当したのである。これらは、政府が東欧の占領地域に住む住民を各民族のカテゴリーに分類する作業に非常に役立った。出版局は、さらに各地域全体の民族構成を調べるための量的調査を実施した。この量的調査の成果がどれほど政府の移住政策に影響を与えたかについては、いまだ不明な点も多いようである。

パブリッツは1936年に、国立公文書館館長アルバート・ブラックマン(Albert Brackmann, 1871-1952)より出版局の指導を引き継いだ。ブラックマンは、東方研究の中心人物であり、その思想はアドルフ・ヒトラーにも支持されたと言われている。パブリッツは、彼の同僚として、東方研究にも協力した。1943年8月にハインリッヒ・ヒムラーが内務大臣に就任すると、出版局は国家保安部の部局になり、SDの業務を直接補佐す

るようになった。歴史研究はもはや重要でなくなり、ポーランド、チェコ亡命政府の資料の分析に従事した。この頃になると、連合国軍の爆撃が激しくなったため、出版局はダーレムからバウツェンに移転され、1945年にはコーブルクに設置された。そのコーブルクで、パブリッツは移転後未開封であったままの資料とともに、進駐してきたアメリカ軍に捕らえられた。アメリカ軍は出版局がもっている資料の価値を認識し、パブリッツにその整理を命じた。彼はその業務をこなしながら、出版局の資料をドイツに残そうと折衝したが、受け入れられず、1948年にワシントンDCの議会図書館に移管された。同時に、パブリッツもアメリカ軍の業務から離れ、マールブルグ大学で研究職に就くことになった。なお、議会図書館にあった資料群は、パブリッツを通じて、ドイツに返還された。1960年代初頭はマールブルグのヘルダー研究所(Herder-Institut)で保管され、1979年になるとドイツ連邦公文書館に移管された。現在も、ドイツ連邦公文書館で閲覧が可能である。

このように、ナチス統治下の時代にドイツのアーキビストは、民族浄化を支える活動に協力するなど国家の歯車の一つとして機能した。ブラックマンやパブリッツは、東方研究にも関与し、学術的な方面からも圧政国家の政策を支援した。政府の方針に反した南アフリカのハリスやオランダのアーキビストとは対照的である。他方、日本では町村役場の職員が記録を守った。日本に公文書館制度がなかったのであるから、当然である。ここで一つ問いたい。戦前、民主主義が確立していなかった時代、公文書管理法のような法規があり、国立公文書館等の組織も整っていたと仮定しよう。そのとき、政府から記録の廃棄を迫られたとき、どれだけのアーキビストが兵事係と同じような行動をとれただろうか。パブリッツになったのか、ハリスになったのか。もし私が当事者であったならば、ハリスになれると答えられる自信はない。

京都大学大学文書館における研修について

神戸大学附属図書館大学文書史料室室長補佐 野邑 理栄子

京都大学大学文書館主催の研修は、2017(平成 29) 年 1 月 24 日(火)～26 日(木)の 3 日間、主催館を会場として開催された。参加者は東北大学史料館公文書室の村上麻佑子氏と筆者の計 2 名。いずれも「国立公文書館等」指定施設の職員である。筆者の参加目的は、主催館における歴史公文書等の取扱い、利用者対応、展示方法等を学ぶことにより、今後の業務遂行に必要な専門的知見及び技能を向上させ、他館との交流を深めることにある。初日は主催館の業務全般説明と施設見学(講師は西山伸教授)、2 日目は法人文書評価選別作業実践(講師は富永望助教)、所蔵資料検索システムと旧制教員履歴検索システム説明等(講師は元ナミ助教)、3 日目は個人情報保護作業説明実践(講師は元助教)、定例打合せ陪席、という充実した研修内容であった。

初日の業務説明では、運営体制の実効性に興味を抱いた。上位の意思決定機関として年 1 回の運営協議会があり、さらに館長と教員による月 1 回の教員会議、教員と実務担当者による週 1 回 30 分～1 時間程度の館内定例打合せがあり、日常業務までを支える実効性の高い運営体制が魅力的だ。拙室でも週 1 回 15 分程度の室内ミーティング(実務上の簡易打合せ)を行っているが、作業進捗報告が主であり、時間的制約の中で課題解決のための“話し合い”には至っていないという自らの欠点を痛感した。

また、常設展示「京都大学の歴史」の見学では、巨大なキャンパスのジオラマを前に卒業生たちが思い出話に花を咲かせることがあるという話をお聞きした。このことは、大学自校史の展示が、大学広報、説明責任、社会貢献という役割だけでなく、懐かしい記憶の回顧ツールとして、卒業生、旧教職員、地域住民などステークホルダーからの期待に応えることができ、彼らと大学とをつなぐ架け橋

になるという重要な役割をもつことを意味するのだと納得した。

2 日目の法人文書評価選別作業実践では、書庫の中で法人文書を一冊一冊内容確認しながら、同館の基準に基づき移管か廃棄かを判断するという作業を行った。評価基準が拙室とは異なる場合があり、慣れるまでに時間を要したが、実に興味深い貴重な体験だった。現用段階で 1 ファイルごとに 1 つの ID が付与されることは、他大学でも見習うべきだろう。神戸大学の場合、法人文書ファイル管理簿記載の 1 件が実は 5 分冊や 1 箱だったということが往々にしてある。文書管理の不備をまねきやすい上に、非現用になれば一括で移管か廃棄かになるので問題だ。考えることの多い実習だった。

所蔵資料検索システムは、公開項目が異なるユーザモードと管理者モードや、チェックを入れた資料の利用請求書を PDF 出力できる機能、幅のある作成年でも検索が可能なことに特に魅力を感じた。教員履歴検索システムについては、うらやましい気持ちが先に立つ。肖像写真、退職後の職歴、適格審査の結果、死去日までも可能な限り網羅されている。神戸大学前身校の教授で京大教授を兼任した石橋五郎や烏賀陽然良の詳細な履歴書が神戸大には無く京大には現存するという事実はショックだった。

3 日目の個人情報保護作業説明実践では、利用制限の具体的な基準や黒塗り作業について興味深い説明を受けるとともに情報交換を行った。さらに館内定例打合せに陪席、多様な実務担当者が専門の垣根を越えて一緒に知恵を出し合い課題解決のために模索する姿が印象的であり、気軽に相談し合える定例の場と雰囲気作りの大切さを学んだ。実に有意義な 3 日間であった。

京都大学大学文書館の研修に参加して

東北大学史料館教育研究支援者 村上 麻佑子

今回、2017年1月24～26日の日程で、京大大学文書館で行われる文書管理に関するアーカイブ研修に参加させていただいた。京大には近年、東北大学の史料館のアーカイブに携わる新任者に対して、三日間の研修を行ってもらっている。また今年は、神戸大のアーカイブの専門家である野呂理栄子さんと一緒にさせていただき、大学アーカイブを学び実践するうえでより実りある研修になったと思う。以下、今回の研修内容に関する所感を述べてみたい。

京大の大学文書館を他大学のそれと比較した際、顕著な特徴といえるのは、配架スペースの圧倒的な広さである。東北大も従来のものに加え今年新たに書庫を設置したが、それでも京大の規模には遠く及ばない。これは、今後も大学が存続する限り永久に増え続ける法人文書、個人文書のことを踏まえた時大変心強いものであり（ただ京大の書架も有限であるから、新たな書庫設置を模索する様子もみられた）、京大の文書管理のあり方を規定する最大の要因にもなっている。



例えば京大では法人文書を特定歴史公文書に指定するための評価選別にあたり、7月～8月にファイル管理で、今年度保存期間満了の保存期間を延長する措置をとったものの以外全てのファイルが、作成元の原課から文書館に移送されてくる。一挙に1万点以上のファイルが文書館に集まり、バーコード登録によって合理的に管理され評価選別が行われた後、移管と廃棄の処理がなされる。この過程で移送されてきたファイルが直接確認され、

特定歴史公文書の対象となる貴重なファイルの見落としが格段に減るわけだが、この手法はまずそれだけの量を配架できる空間がないとできない。東北大の書架は極めて限られるため、実際に原課に赴き移管の可能性のあるファイルを見て評価選別を行い、特定歴史公文書のみを史料館に配架することとなる。原課と直接交流でき、また書庫を見せてもらい現用文書の管理状況を知れる利点もあるのだが、常に移管すべきファイルを見落とす危険と隣り合わせの作業となる。

また書庫の規模の違いから、法人文書に移管評価を下す判断基準も異なる。京大では在籍証明書や高額な契約関係、一部の出勤簿など、開示請求、裁判、契約に必要となるものが保存される。これは移管後も事務方がファイルを使用できることを重視するため、配架スペースを利用した文書館と事務組織との強い結びつきを示すものでもある。一方東北大では、事務方で必要なものは原課で延長保存してもらうのが原則でこの類は移管対象から外れる。さらに移管対象を絞るため、各種委員会ファイルなども、どの委員会で最終的な意思決定がなされるか上下関係を把握し、大学の歴史や組織運営に関わる必要なもののみを移管している。

このようにそれぞれの持つ文書管理の特色を肌で感じながら、デジタルアーカイブの運用面では、デジタル化資料の閲覧、保存、印刷が可能な点や、資料請求のPDF出力が複数行えるなど、東北大でも参考になる利用者への気配りを色々と学ぶことができた。また法人文書、個人文書の利用制限審査の基準について議論した際には、利用制限をそれぞれの機関で自由に設定できるのは、機関の個性となるものであり、資料利用に可能性を広げるあり方だとのお考えがとても印象に残った。これを敷衍すれば、先に述べた文書管理システムの違いの結果として、集積されていく資料からなる館ごとの個性もまた、資料利用の幅を広げていく面白みと繋がっているといえるだろう。今後も互いに良い部分を学び取り、切磋琢磨できる関係でありたいと切に思う研修であった。

京大と三高

—その微妙な関係—

京都大学大学文書館教授 西山 伸

京大の前身は三高？

京都帝国大学（京大）と第三高等学校（三高）、戦前期の京都における代表的な二つの高等教育機関とってよい。

この両者の関係について、京大の前身は三高である、つまり三高が改編されて京大になったのだ、という言説が流されることがある。例えば、2009年5月4日付の『朝日新聞』朝刊に載った京大に関する説明では「京都大学は、明治政府が1869（明治2）年に大阪に開設した舎密局以来の伝統がある。理学所、大阪専門学校など名称変更を重ね第三高等学校時代に京都に移転。第三高等学校を経て1897年、わが国2番目の国立大学として京都帝国大学が設立された」とある。

言うまでもなく、制度的にはこれは誤りである。上記のように、第三高等学校は大阪から京都に移転し、現在の京大本部構内を敷地とした。その後1894年に第三高等学校に改編され、1897年に京都帝国大学が置かれるにあたり、敷地と建物を京大に譲って南隣（現在の吉田南構内）に移転したのである。だから、京大と三高は制度上全く別の教育機関である。それが、戦後の教育改革によって1949年に両者は包括されて新制京都大学となったのだ。

とはいえ、上記の記事を書いた記者の「不勉強」をあげつらうことはできない。1998年に刊行された『京都大学百年史』総説編では、まず第1章を「創立前史」として舎密局から京大創立時までの三高について詳しく記述され、次いで第2章を「京都帝国大学の創設」としているの、目次を見ると京大の前身が三高なのだと受け取るのも無理はない。同書では、京大創立以後の三高については戦後の包括まで全く記述がないのだからなおさ

らであろう。ちなみに、東京大学や東北大学など旧制高校を包括した他大学の沿革史に同様の例はない。京大の沿革史だけの特徴的な書き方である。

京大創立をめぐる

三高およびその前身学校には、大学昇格の可能性があったとされている。例えば、大阪から京都へ移転してきた第三高等学校の敷地は他の高等学校に比べてかなり余裕を持っているが、それは将来大学に昇格させる意図があったからだ、とか。また、1894年三高にはそれまで他の高等学校になかった工学部が設置されるが、それも大学にいずれ昇格させる意図の表れであった、とか（どちらも『京都大学七十年史』より）。

確かに、三高の敷地と建物は京大のものになったし、わずかな年月で廃止されることになる三高工学部で教えていた教員の多くは新設京大の理工科大学（現在の理学部・工学部）に移っている。しかし、いずれも結果としてそうなったのであり、当初からそのような意図があったのか、あったとしてもそこでいう大学とは東京にあった帝国大学と同等のものなのか（当時、帝国大学とは別に「低度な」大学を設置しようという有力な案があった）、など「三高→大学」論をそのまま首肯できない点が多い。

さらに、京大創立時には三高を改編して京大にするという案が実在した。当初「第三高等学校ヲ更（アラタ）メテ京都帝国大学トナス」となっていた条文が「京都ニ帝国大学ヲ置キ第三高等学校ノ土地建物ヲ以テ之ニ充ツ」と修正されている文部省の資料が残っている（時計台記念館の歴史展示室で展示している）のがその証左である。しかし、もちろ

んこの通りにはならなかった。

このように、京大が創立されるにあたっては、三高の姿が浮かんで消えていたのだ。

両者の関係 ―いくつかの数字から―

では、こうした両者の実際の関係はどうだったのか、いくつかの数字から見てみたい。そもそも三高卒業生はどれくらい京大に進学したのだろうか。当時の受験システムでは、高校から大学へはほぼ（大学・学部によっては競争があったが）そのまま入学することができた。そうしたことを踏まえた上で、1915年から1940年まで、5年ごとの三高卒業生の進学先を示したのが別表である。文科と理科ではかなり傾向が異なるので分けて表示している。圧倒的多数が京大と東大のどちらかに進んでいることにまず気づかされるが、文科はその両者が拮抗しているのに対して、理科では1920年代の半ばごろから京大進学者が東大を大きく上回っていくことが分かる（「記載なし」は浪人と考えられる）。特に理科の三高生にとって京大は物理的距離だけでなく、進学先としても極めて身近なものになっていったのだ。

教員についてはどうか。いわゆる旧制期（1949年5月以前）に京大の助教授以上に就任した1025名の学歴を見ると、三高（前身

学校を含む、以下同）出身者は246名、一高115名、二高34名、四高41名、五高29名、六高49名、七高15名、八高23名となっている（当館の「教員履歴データベース」による）。三高出身者は京大教員の約四分の一を占めており、確かに「最大勢力」であった。

また、戦後改革で京大と三高が包括されて新制京大となった時三高の教員はどれだけ京大に移ったのか。包括直前の1949年5月に三高に在籍していた計41名の教授（『神陵史』のうち、37名が新制京都大学の分校（のち教養部）教員となっている（『京都大学百年史』、ただし21名は助教授に「降格」）。分校・教養部に関していえば三高の空気はほぼそのまま京大に引き継がれたと見てよい。

京大も三高も（ちなみに三高の南隣にあった府立一中も）「自由」の学風（校風）で知られていた。同じ京都の、しかもごく近い距離にあった両者が、性格的にも共通するものをもっていたことは間違いない。さらに三高の方が歴史が古いことに加えて、京大創立をめぐる微妙な関係もあって、「京大の前身は三高」という言説が広まったのであろうか。

制度的な成り立ちを正確に押さえつつ、両者のユニークな関係性を見ていくのは興味深い。

〔別表〕 三高卒業生進学先

	進路 / 卒業年	1915	1920	1925	1930	1935	1940
文科	京大	64	47	72	70	71	48
	東大	64	79	62	50	45	47
	他大学	0	2	1	3	9	1
	記載なし	3	0	2	17	15	17
	死去	0	0	0	0	1	0
	小計	131	128	137	140	141	113
理科	京大	65	69	102	79	71	84
	東大	52	52	16	14	17	22
	他大学	23	8	7	2	7	8
	記載なし	2	2	1	38	43	7
	死去	0	0	0	1	0	0
	小計	142	131	126	134	138	121
計		273	259	263	274	279	234

・各年の『第三高等学校一覧』より作成。

リスボン市公文書館 (Arquivo Municipal de Lisboa, Arco do Cego) 見学記

京都大学大学文書館助教 元 ナミ

2017年2月14日、ポルトガル・リスボン市公文書館 (Arquivo Municipal de Lisboa, AML) を訪ねた。リスボン市で作成された13世紀から現在までの歴史的公文書を受け入れ、保存・公開する機関であり、ポルトガル国内の自治体レベルでは最大規模として知られている。公文書館は文書の作成時期と資料の媒体によってリスボン市内に4つの施設に分かれている。

今回訪問したアルコ・ド・セゴ (Arco do Cego) 館には、主に17世紀から20世紀までの市から移管された公文書が保存されている。それより古い時期の資料保存及び1996年以降に移管される文書はカンポリデ (Campolide) 区域にある新館リベルダデ (Liberdade) 館で受け入れている。その外に市内中心部に写真コレクションを公開する施設 (Fotográfico) と映像コレクションを公開する施設 (Videoteca) を設置している。



写真1 リスボンの高等工科大学 (Instituto Superior Técnico) の近くにある、AML, Arco do Cego 館
2017.02.14 筆者撮影

公文書館のHPは当然のことながらポルトガル語のみで提供されている。ポルトガル語ができないため、訪問10日前にアルコ・ド・セゴ館を見学したいと英語でメールを送ったら、早速快諾の返事が届いた。英語圏以外の国では珍しく、大変ありがたいことだった。

アーキビストのVasco Brito (バスコ・ブリト) 氏、メールでやり取りしてくれたLuís Pica (ルイス・ピカ) 氏ともう一人の職員に対応してもらった。

3階建ての古風な建物の中には、閲覧室と事務空間、書庫がある。ここは新規の受入を行っておらず、文書の管理と公開が中心業務である。所蔵資料関連情報の専門図書閲覧、資料の修復、デジタル化、教育普及支援などは、リベルダデ館で行っている。

閲覧室は1階にあり、検索用のパソコン2台と、閲覧者用のテーブル、所蔵資料の目録、公文書館の所蔵資料を使って刊行された図録や参考図書などが備えられている。

1階と2階の書庫には、都市整備、計画関係の文書類が主に保存されている。道路、水道、さらに空港、港湾建設といったインフラ関係の文書、様々な用途とサイズで作成された図面なども豊富に保管されている。他部局等とのやり取りの記録 (往来書簡) の他、リスボン市の過去がわかる区画別の地図類、法律、規則の制定や購買、契約締結のお知らせなど、市議会の決定事項を記録した文書類も常に移管されてきた。市の都市景観の重要な要素である街並みの建造物、造形物の他、道路を飾っていたタイル、ガス灯の図案なども

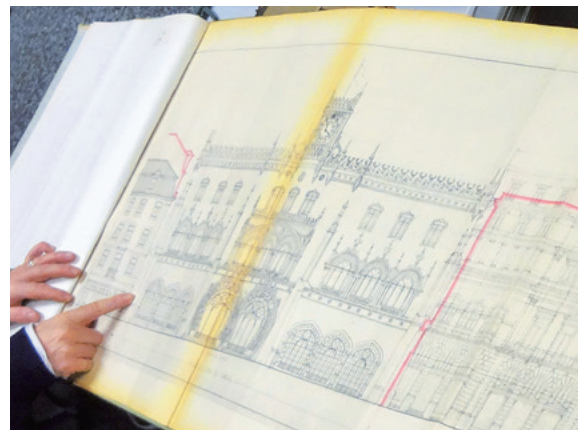


写真2 19世紀後半に設計されたリスボン中央駅 (Rossio) の図面 2017.02.14 筆者撮影

利用頻度が高いという。さらに、市民の遺産相続関係書類（遺言状）も所蔵されている。



写真3 現在のリスボン中央駅。設計当時の姿(写真2)をほとんどそのままに見ることができる。
2017.02.12 筆者撮影

3階には、20世紀あたりまでの市の退職職員の人事記録（死後50年で一般公開）、選挙関係の名簿、議会の財政関係文書、議会に対する市民の問い合わせの記録、販売登録・許可証や手数料納付書類の他に伝票なども残っていた。



写真4 3階書庫の様子 2017.02.14 筆者撮影

これらの公文書は、リスボンという都市の歴史を説明する際に最も重要な1次資料として使われている。重要な建築物、広場、公園、庭園などの改補修の際にも必ず参考にし、街並みの景観を維持することにも広く利用されている。そのうち利用頻度が高い資料はデジタル化され、AMLの検索・閲覧室予約システム上で公開、ダウンロードできるようになっている（<http://arquivomunicipal2.cm-lisboa.pt/sals/online/ui/searchbasic.aspx?filter=AH;AI;AC;AF>）。

ただ、保存環境は決していいとは言えず、建物の老朽化が進んでおり、日光や温湿度の対策等が不十分に見えた。保存空間の狭隘化と収蔵能力の限界のため、近い将来にリベルダデ館、フォトグラフィコ館と統合し、新館を建てる計画もあるようだ。そうなったら、長い間、公文書の保存庫として使われた現在の建物もアーカイブズになるだろうね、と笑いをしたのを覚えている。

帰り際に、AMLの紹介CD、絵葉書とキャラクター入りのエコバックをもらった。KivoはAMLが行っている低学年向けの教育普及プログラムで活用されているAMLのキャラクターだそう。遠くのリスボンの公文書館でゆるキャラに会うとは。このまさかの発見があるのも、見学の楽しみであろう。



写真5 AMLのキャラクター Kivo 君

実は Brito 氏以外のお二人が英語の通訳と見学対応だけのために、わざわざリベルダデ館から来てくれたとのこと。さらに、自治体の現用文書が公文書館に移管、保存される仕組みに関心があるならば、リベルダデ館へ見学申し込みをしてもよかったね、と Pica 氏から言われた時には、訪問する公文書館の言語ができない上に、事前調査が足りなかったことを反省するしかなかった。

それでも世界的な都市として有名なリスボンの街並みの維持・管理の裏に、大切に保存されてきた公文書の力があったことを目見て確認できたことは、地方公文書館の所蔵資料の活用例として大いに参考になると感じた。

最後になったが、今回対応してくれたAMLの3人のアーキビストに心から感謝の意を伝えたい。

[日誌] (2016年10月～2017年3月)

2016 年

- 10/ 1 西山教授、京大生ファミリーイベントにおいて、歴史展示室およびキャンパス案内。
- 10/11 UNN 関西学生報道連盟より、企画展「京都帝国大学の「大学自治」」取材のために来館。
- 10/14 学外より、京大創設以来の医学部医化学教室の在籍者について照会。
- 10/17 学外より、山崎直樹の資料について照会。
- 10/17 学内より、ホームカミングデー準備のため70年代以降のキャンパスを撮影した写真について照会。
- 10/20 学内より、京大創立時の式辞について照会。
- 10/20 大学文書館教員会議。
- 10/22 西山、立命館創立者・中川小十郎生誕150年記念講演会（於・立命館朱雀キャンパス）において「中川小十郎と京都帝国大学の創立」と題して講演。
- 10/24 高瀬裕章氏より、京都帝国大学法学部講義等受講資料寄贈。
- 10/27 中国人民大学・学習院大学より、大学文書館と歴史展示室見学のため来館。
- 10/29 津田健氏より、旧制第三高等学校・京都帝国大学関係資料寄贈。
- 11/ 4 天野光三氏より、旧制第三高等学校・京都大学関連図書・資料寄贈。
- 11/ 5 西山、第11回ホームカミングデー卒業生×在学生交流イベントにおいて「あの頃の京大—1970年代・80年代—」と題して講演。
- 11/ 7 NHKより、「じもてい愛情マップ」クイズ出題のため、時計台の歴史など取材。
- 11/10 西山、第42回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会及び研修会（於・男女共同参画センター「フレンテみえ」）において「アーカイブズ入門 組織におけるアーカイブズの役割」と題して講演。
- 11/11 韓国ソウル大学校より、大学史編纂および編纂資料収集・保存の先進事例調査のために来館。
- 11/13 西山、日本音楽学会第67回全国大会（於・中京大学）において「東京音楽学校における学徒出陣の記録について—京都帝国大学の事例とあわせて—」と題して報告。
- 11/15 企画展「京都大学における女性—帝国大学時代から1950年代まで—」開催（～2017年1月15日）。
- 11/22 学内より、折田彦市像の台座について照会。
- 11/24 学外より、文科大学教授・内田銀蔵が関係する文書の所在について照会。
- 11/30 事務補佐員安井千尋退職。
- 12/ 1 関西テレビより、合格発表時の合格者の胴上げについて取材・撮影。

- 12/ 1 派遣職員竹内里香雇用。
- 12/ 8 学外より、小栗栖国道がもらった恩賜の銀時計の寄贈について照会。
- 12/10 西山、第48回湘友会セミナー（於・神奈川県立湘南高等学校）において「京都大学の歴史を考える—京都大学大学文書館の経験から—」と題して講演。
- 12/14 学外より、元文学部非常勤講師の山口茂一の履歴について照会。
- 12/15 海外より、濱田耕作と狩野直喜が中国人学者と交わした書簡資料の所在について照会。
- 12/15 大学文書館教員会議。
- 12/19 NHKより、三高と京大の歴史的関係について照会。
- 12/20 元助教、ku-librarian 勉強会（於・京都大学附属図書館）において「アーカイブズとは何か—公文書館の仕事—」発表。
- 12/22 沖縄県公文書館より、大学文書館の施設・業務視察のため来館。
- 12/22 UNN 関西学生報道連盟より、企画展「京都大学における女性—帝国大学時代から1950年代まで—」取材のために来館。

2017 年

- 1/ 6 学外より、第三高等学校校長・中島永元の職員履歴について照会。
- 1/11 学外より、歴史展示室で放映している学生紛争の映像について照会。
- 1/18 NHKより、戦時期の医学部について取材。
- 1/18 大学文書館教員会議。
- 1/20 西山、日本体育図書館協議会2016年度研修会「自校史教育を図書館につなげる」（於・日本体育大学）において「自校史教育と学修支援—アーカイブズの立場から—」と題して講演。
- 1/21 元、次世代デジタルアーカイブ研究会の代表として、「デジタルアーカイブの再設計～資料の利用のために何をすべきか／何ができるか～」開催（於・京都大学）。
- 1/24 東北大学・神戸大学より、大学文書館業務研修のため来館（～1/26）。
- 1/27 京都大学同窓会より、所蔵資料検索システムにて公開中の吉田神社の節分祭の写真利用について照会。
- 1/27 学内より、京都大学キャンパスの地図利用について照会。
- 1/31 京都大学体育会より、福岡医科大学時代の寄付受け入れについて照会。
- 2/ 1 名倉道隆氏より、『われ汝を見捨てじ：野田もと刀自追悼集』寄贈。
- 2/ 3 学外より、武田五一と人文科学研究所の写真利

- 用について照会。
- 2/10 京大交響楽団より、学生集会所の写真利用について照会。
- 2/13 大学文書館教員会議。
- 2/15 京都新聞より、滝川事件時の学生運動関係の写真について照会。
- 2/16 京都新聞より、新聞連載のため『学生評論』複製版表紙の使用について照会。
- 2/16 NHKより、「ファミリーヒストリー」に関連して三高在学生につき照会。
- 2/21 京大合唱団より、活動記録や写真などの寄贈について照会。
- 2/23 村尾裕子氏より、父・熊谷照蔵の学生票他資料寄贈。
- 2/27 (株) ダイヘンより、理工科大学本館、日伊交換教授ツッチ博士の写真利用について照会。
- 2/28 京都大学イノベーションキャピタル(株)より、時計台展示室の模型の写真利用について照会。
- 3/ 1 NHKより、戦時期の医学部を中心とした軍事研

- 究について取材。
- 3/ 1 舞鶴市役所文化振興課に、木下広次関係資料「丹後国田辺城絵図」貸出。
- 3/ 3 NHKより、京大における自由について取材。
- 3/ 3 西山良平氏より、柴田実・上田正昭関係資料寄贈。
- 3/ 7 成城学園教育研究所より、狩野亨吉の写真利用について照会。
- 3/ 7 NHK京都より、創立期の京大生に対する地域住民の認識について取材。
- 3/ 9 学外より、教員履歴データベースで公開中の戸田正三の履歴について照会。
- 3/ 9 東京学芸大学より、大学文書館の施設・業務視察のため来館。
- 3/13 大学文書館教員会議。
- 3/21 前川玲子氏より、「国際高等教育院設置反対関係資料」を寄贈。
- 3/28 NHK京都より、京大における学徒出陣について取材。
- 3/31 オフィス・アシスタント梅藤タ美子退職。

大学文書館の動き

頼原退蔵関係資料の公開

大学文書館は、4月10日より頼原退蔵関係資料(1189点)を公開しました。頼原退蔵(1894～1948)は、本学文学部助教授・教授を勤めた近世文学専門の国文学者です。頼原は54歳で死去したため、決して長い人生だったとはいええないものの、執筆した著書・論文、および収集資料・蔵書の量が膨大であったことが知られています。

その著作の大部分は、すでに全21巻もの『頼原退蔵著作集』(中央公論社)としてまとめられ、収集資料は、『京都大学蔵頼原文庫選集』(臨川書店)として刊行が開始されました。これらのことは、頼原の研究成果や収集資料が、現在の研究においても、いかに有益なものであるかを物語っているといえます。

頼原関係の資料のうち、資料・蔵書は、本学文学研究科図書館の頼原文庫・関西大学の頼原文庫・大阪大学に収蔵されています。当館が所蔵するのは、著書・論文の手書き原稿やその構想材料となったメモ・ノートのほか、日記、著名人と議論した葉書など、主に同氏や同氏と縁のある人々の手によるものです。

資料群のうち、構想材料メモ・ノートは、頼原が数多くの資料を謄写して検討コメントを書き込んでいることから、近世文学研究において、とりわけ重要な資料となるでしょう。また日記は、頼原が戦時中の京都に居住していたこともあり、当時の街の様子や生活をうかがうことができ、歴史学上でも貴重な資料となるといえます。



二条城が表紙の構想材料ノート。「うきよ考」と題し、「浮世姿」・「浮世人」など、「浮世」が付く言葉の用例をあらゆる古典から抜き書きしているもの

「雪山賛歌」と「エルダー先生」

京都大学大学文書館助教 元 ナミ

日本でも広く歌われている「雪山賛歌」という歌がある。この歌は三高と京大出身の化学者で登山家、探検家としても有名な西堀栄三郎が三高山岳部の歌として作詞したと知られている。原曲はアメリカの民謡「いとしのクレメンタイン：Oh My Darling Clementine」で、この「クレメンタイン」は三高在学当時、英語教師の「エルダー先生」から教わり、山岳部員はみんなよく歌っていたと語られている。

西堀が三高に入学した1922年、確かに「エルダー先生」は勤務していた。チャールス・ゴードン・エルダー（Charles Gordon Elder）、スコットランド・グラスゴー出身、アバディーンで大学を卒業した英国人である。大学文書館所蔵の『傭外国人一件書類 大正八年七月以降昭和十二年三月迄』（三高-14230）によると、1910年9月9日、鹿児島県の第七高等学校での英語教師の履歴が彼の日本における初めての勤務記録である。1915年8月末から1919年1月まで第一次世界大戦に参戦するために帰国したが、同年再び日本に戻り、10月1日から三高で英語教師として教鞭をとった。1934年3月31日付で契約が満了するまで、約25年間三高の外国人官舎を住まいとして勤務していた。また、1920年8月から帰国するまで、京大の文学部講師としてラテン語と英文学を教えた。

興味深いのは、「クレメンタイン」の歌を「エルダー夫人」から習ったという三高生もいること。三高で働いた教師・講師の任免等に関係する他の書類を調べてみると、「エルダー夫人」も三高の英語講師として勤めていた。夫と同じくスコットランド出身で、アバディーン出身の英国人、ジェーン・パターソン・エルダー（Jane Paterson Elder、旧姓 Murray）。通称「エルダー夫人」と書かれているこの人物は、1912年7月に結婚し、鹿児島で勤務

していた夫に連れられて日本に来たと思われるが、夫のチャールスとどのように知り合ったのかは残念ながら不明である。彼女も教員の資格を持っていたためか、日本で初めて暮らした鹿児島で英語を教え、京都に来てからも京都女子専門学校、大阪市高津中学校や大阪外国語学校で教鞭をとった（エルダー夫妻の大阪での勤務については、藤本周一「戦前昭和期に大阪府下の学校等（旧学制）に勤務した外国人教師について（その1）、2007；（その2）、2008；（その3・完）、2008を参照）。エルダー夫妻が故郷のスコットランドに帰った後、チャールスにはそれまでの功績が認められ勲五等瑞寶章が下賜された。勲章が英国大使館を通して送付されたことは、イギリスの1934年9月14日付官報にも掲載されている。翌年には終身年金証書も送付された。

エルダー夫妻については、三高の同窓会誌や卒業生の自伝などでも言及されている。戦後、三高卒業生の中にはヨーロッパを訪問する際に、エルダー夫妻を訪ねた人が何人もいるくらいだから、生徒たちに親しまれていたのは確かであろう。しかし、戦前の外国人教員に対する処遇や教科内容、授業風景などについてはあまり資料が残っていないのが現状である。

さて、三高が新制大学に統合された際、山岳部も京大に合併され、京都大学学士山岳会（AACK）の母体となった。三高山岳部では「雪山賛歌」を部歌と呼ばず、「雪よ、山よ」と呼んでいたらしいが、AACKがその著作権を登録する際、西堀を作詞者とし、西堀はその一切の権利をAACKに寄付した。現在「雪山賛歌」がよく知られているのは、エルダー夫妻が貢献した英語教育の一つの現れではないだろうか。